

歌の思い出

関省吾

南高校の標本室に初めて池上先生をお訪ねしたのは昭和36年(1961)ではなかったかと思う。その頃、天野先生(当時は平田先生)につれられて、弥彦山の白濁病菌の寄生植物を調べていて、植物の指導を受けるため天野先生とお伺いしたのであった。

その後、昭和39年(1964)にじねんじょ会が発足し、池上先生、尾崎先生に顧問をお願いした。この頃から会員が池上先生と山に入る機会が急に多くなり、現地での指導はもとより、まとめの指導も受け、本当に貴重な時間をさいていただいた。まさにじねんじょ会の育ての親であり、会が細々ながら長く続いてこれたのも池上先生の支えがあったからである。

池上先生とご一緒した山は、飯豊連峰、朝日連峰、谷川連峰をはじめ県内各地、さらには福島・相馬地方(西山宅泊)、埼玉・秩父地方(斎藤宅泊)など県外に足を伸ばしたこともあった。先生は遊んでばかりいる私達を実に根気強く、上手にほめ、おだてながら植物について熱心に指導された。植物を通して、真の教育者の姿と感じていたのは私だけではないと思う。

先生の思い出はあまりにも多く何を書いてよいか悩んで時間ばかりたってしまったが、先生が教えてくれた歌(歌詞)を書きとめておきたいと思う。

山の夜、テントの中で、時には焚火を囲んでの勉強会は実に楽しいひとときである。(飲みすぎに批判もあるが)ぶかっこうな山のような荷をかつぎ、宿泊地への到着が必ず最後になる先生は相当疲れているはずなのに、夜遅くまで私達につき合ってくれた。先生の植物の話、山の経験談は実に面白く、勉強会の楽しみの一つであった。そして気分がのると古い歌をくわしい解説(どこで誰が作詞し、誰が作曲したかなど)つきで、美声(先生もかなり自信を持っていた?)を張りあげ、実に楽しそうに身振りをまじえて歌ってくれた。

それらの歌の中にはよく知られた歌もあったが、先生だけが知っている歌があり、そのいくつかを教えてください。

(1) 浪路はるかに(1982. 8. 6記録)

・南満州蒙古のはてと
男意気地のそれ草枕

・遠く南米ブラジルまでも
男度胸のそれ旅枕

・潮の八重路の極地でさえも
男ひとりのそれみそぎ場所

・どこで果てよと墓所はいらぬ
日の丸国旗でそれ身を包む

昭和57年(1982)の夏合宿は高橋昭夫さんの案内で矢代川をさかのぼり、火打山をめざした。8月4日、新井高校に集合、移動して矢代川第三発電所の近くで幕営。8月5日、重い荷に苦しみながら発電所の取水口にたどりつく。8月6日、一本杉(熊小屋)で幕営。

この夜は翌日下山する人が多いので、盛大な勉強会となり、勉強しすぎて木にかけ登る人が出るほど盛り上った。この時“浪路はるかに”を覚えてもらったのである。

8月7日さらに上流の調査をし、8月8日には下山し、新井の井出さん宅に泊めてもらった。そして8月9日には牧村、三和村方面を調査し、鷹羽鉱泉に素泊り(1,200円)した。

8月10日、鉱泉の周辺を調査して解散したのであるが、池上、奈良場朝湯を楽しむ、と野帖にメモがある。

(合宿参加者 17名)

(2) 流浪の旅(1986. 8. 8記録)

流れながれて落ちゆく先きは
北はシベリア南はジャワよ
いずこの国を墓所と定め
いずこの国の土と変わらん
流浪の旅のいつまで続く

町の工場汽笛が止んで
オロラの空に光かがやく
昨日は東 今日西と
流浪の旅のいつまで続く

はてなき国の世界のはてへ
流浪よ 流浪の旅よ

昭和61年(1986)の合宿は雨飾山を中心に行われた。8月4日、糸魚川駅に集合。車に分乗して梶山までゆき、雨の中を梶山新湯に登った。8月5日は激しい雨のため停滞(完全な1日停滞は最初で最後か)した。紙かえをしたり、池上先生の講義を受けたり、温泉に入ったり。8月6日は小雨について登山開始。途中雨はやんだが、例によって前後

